

万葉の川心

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

（巻第七 一一九一番歌）

妹が門 出入の川の瀬をはやみ

わが馬つまづく 家思ふらしも

とある夏の日、仲間から海辺のバーベキューに誘われた。家族はそれぞれ用があり、単独で参加することになった。電車の時間を調べたが何かしつくりこない。「そうだ、久しぶりにバイクで行こう」と決める。下戸ゆえにどうせ飲まないし、関東甲信越小さな旅・・・と独り言。いざ鎌倉ならぬ目指せ横須賀。国道十六号をひたすら南下。交通ルールを遵守しつつ、炎天下も何のその。気分は二十代。ショーウィンドーに映る姿は見えない見えない。流れる街の景色を堪能する。もしも前世があるなら自分は馬に乗っていたのではないかと思う。遣伝子に組み込まれた快感とともに久しぶりの風に吹かれた。父が存命の時、私たちが帰省するときは到着時刻を必ず正確に知らせる必要があった。なぜなら、父は今か今かと門を出たり入ったりして待っていたからだ。知らせたところで随分前からそうしているのだが、この歌を読むとそんな父を思い出す。携帯電話の普及した現代では、どこにいても何分まで着くのかすぐに分かるようになった。それでも父はきつと門に出て待っているだろう。この思いは万葉の昔から変わらないのかもしれない。歌中「出入りの、入の川」の所在は未詳だが、写真の京都市西京区大原野上羽町の入野神社付近の川かという説もある。「妻が家の門に出たり入ったりする入の川。その川瀬は速いので、私の乗る馬はつまづくことだ。家人が私の



京都市入野神社付近、善峰川

ことを思っているらしいなあ。」この歌は、乗っている馬が川瀬でつまづくときは、想い人の自分を慕う恋しさがそうさせるという俗信からきていて、〇三六五・一一九二・三二七六番歌にも見られる。

ここでいう羈旅とは、すなわち家を離れて目的地へと進むことである。生きて帰ることは、今よりも難しかったろうか。音信を知らせることすらどうであったか。鳥の声に家族の呼び声を重ねる。速い川瀬を渡るときには、家族を想いつつ慎重に渡り、離れていても守られている大きな力を感じたのかもしれない。美しい景色を見ると、どうにかこれを家族に持って帰って見せたいものだと思ふ歌がある。お土産にと貝を拾う歌、その漁師になったつもりで海に潜って君のために真珠を採ったと詠む歌もある。万葉人それぞれ旅の想いがある。面白く、しばし時を忘れて巻の七を読み耽った。

たらふく食べて騒いで、帰りは予想通りの夕立。雨合羽を着て「これから帰ります」とメールする。「気をつけて」の返信に家族一人ひとりの顔を思う。買い物リストを頭に浮かべ、寄り道ルートと時間を確認。帰る家があり、待つ人がいる。川を渡るたびに家が近づいてくることを実感する。「ただいま。」ドアを開ければおなかを空かせた家族がいた。二十代よ、さようなら。浦島太郎の玉手箱のように、現実に戻れるのもまた良き旅の醍醐味なり。